

釜石、大川小、阪神・淡路 命守る「あの日」の体験語り継ぐ ぼうさいこくたい開幕 神戸



語り部としての迷いも率直に吐露した菊池のどかさん。「避難できたのは防災教育のおかげ」とし、「奇跡」でなく「釜石の出来事」と呼ぶ=23日、神戸市中央区脇浜海岸通1（撮影・小林良多）

拡大

人と防災未来センター（神戸市中央区）など兵庫県が会場となった国内最大級の防災イベント「防災推進国民大会」（ぼうさいこくたい）は23日、2日間の日程を終えて閉幕した。この日は阪神・淡路大震災や東日本大震災の被災者、遺族らが、「あの日」を伝え続ける意義と葛藤を語り合った。（上田勇紀、井川朋宏）

「私が話しているのか。そんな葛藤を持ち続けてきた」。三陸復興協議会（岩手県）主催のセッションで岩手県釜石市の語り部、菊池のどかさん（27）が胸の内を明かした。

東日本大震災当時は、市立釜石東中学校の3年生。防災訓練の経験を生かし、生徒たちは隣接する小学校の児童の手を引き、沿岸の校舎から内陸へ走った。その迅速な避難は「釜石の奇跡」とも呼ばれ、菊池さん

も当事者の一人として注目されたが、「家は内陸で家族も無事。そんな自分の語ることが、震災のすべてと思われないか」と悩んだ。

それでも語り部になったのは、「命を守ることにつながる」と思ったからだ。「聞いた人が、一人でも防災について考える。そのきっかけになればいい」

防災教育学会の意見交換では、東日本大震災による津波で児童74人、教職員10人が犠牲になった宮城県石巻市立大川小学校で、6年の次女みずほさん=当時（12）=を亡くした元中学教諭の佐藤敏郎さん（59）が映像を流した。



宮城県石巻市立大川小6年だった次女を亡くし、語り部を続ける佐藤敏郎さん=23日、神戸市中央区脇浜海岸通1

拡大

写されていたのは、津波で廃墟と化した大川小と、子どもたちで活気に満ちていた震災前の同小。「訪れた人に『何もなかった場所ですね』と言われるけど、ここには町が、生活があった」。みずほさんは、間近に迫った卒業式や中学校進学を楽しみにしていたという。

「何のために伝えるのか。怖がらせるためじゃない。（聞いた人が）助かるために伝えている」と佐藤さん。語り部団体「大川伝承の会」共同代表として、震災だけでなく、震災が奪った尊い日常も語り継ぐ。

別会場では阪神・淡路大震災で1歳半の長男将ちゃんを失った西宮市の高井千珠さん（61）が「生きることさえつらい毎日だったが、息子が生きた証しを残したかった」と振り返った。



語り部としての迷いも率直に吐露した菊池のどかさん。「避難できたのは防災教育のおかげ」とし、「奇跡」でなく「釜石の出来事」と呼ぶ=23日、神戸市中央区脇浜海岸通1（撮影・小林良多）

拡大



阪神・淡路大震災で長男を亡くし、その体験を伝えることの葛藤を明かす高井千珠さん（中央）=23日、神戸市中央区脇浜海岸通1

拡大

阪神・淡路の5年後、「将君のホームページ」を開設し、幼くして逝ったわが子と震災前後の出来事、助かった双子の娘への思いをつづった。語り部活動にも力を入れたが、ある時、「個人の話を伝えても仕方がない」と言われ、「伝える意味は何なのか。つらくなった。経験していない人とギャップもある。その差をどう埋め、何を伝えればいいのかすごく悩んでいる」という。

「私が伝えられるのは自分の体験。未来に残す意義があるのか、知りたい」と思いを吐露し、会場の大学生らと交流を深めた。